

産直施設と共に成長 ～ビジネスを学び、経営の一角に～

豊橋市 中村美恵さん（菜ッ花園）
花き（鉢花）

【令和元年10月7日掲載】

豊橋市で鉢花を生産する中村美恵さんは、市内のファーマーズマーケット J A あぐりパーク 食彩村（以下、食彩村）への鉢花出荷を担当し、生産する鉢花全体の4分の1以上にまで、直売の比率を伸ばしてきました。POPは、コンテストで受賞するほどの腕前です。消費者と直結する今の仕事にはまだまだ伸びしろがあり、「なによりすごく楽しい」と話してくれました。

食彩村との出会い

中村さん夫婦と長男の優希さんで経営する「菜ッ花園」は、合計約5000m²の施設とほ場でシクラメンやボロニアなどの鉢花を生産しています。2007年に優希さんが就農を決め、自身もパートさんと同じような働き方ではいけないと感じていた頃、女性農業者が集う食事会に参加するようになりました。そこで、東三河で最大級のファーマーズマーケット「食彩村」がオープンすることを知りました。菜ッ花園は、市場出荷がメインでしたが、女性農業者として積極的に活動している先輩達に背中を押され、美恵さんが直売所への出荷担当となって、食彩村での直売を始めることに決めました。

食彩村の販売については、出荷する品目や価格の決定、毎日の出荷作業、販売額の管理も全て美恵さんが行っています。商品の魅せ方を工夫し、母の日などイベント時には陳列棚も手作りして売り場づくりも自ら行っています。

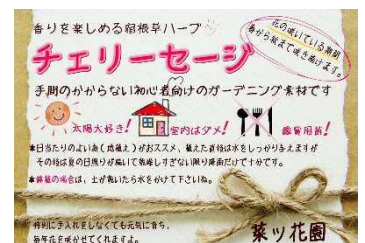


中村美恵さん

日暮れが惜しいほど仕事楽しい！

美恵さんは以前から、ハウスに直接花を買いに来た方への対応や、パソコンを使った事務作業をしており、そうした経験が食彩村での販売に活かされました。店頭で花を長く楽しむコツを説明すると、迷っていたお客さんも喜んで花を買ってくれたという経験から、そうした情報を常に伝えられるよう、POP作成を始めました。アイデアを巡らせて仕事をしていると、気づいたら明け方になるほど夢中になっていることもあるそうです。中村さんの作成したPOPは、日本農業新聞のPOPコンテストで5回入賞し、2015年には準グランプリを受賞しています。

以前は、パートさんと一緒に、決まった時間が過ぎたら作業を終えて家に戻りたい、と思うこともあったそうですが、今は自分の目線で考えて仕事ができ、やりたいことが尽きないそうです。



手作りのPOP

家族で得意分野を役割分担

夫の孝康さんは「生産に徹したい」と日頃から口にしていく職人気質で、多くの品目・品種を組み合わせる年間の栽培計画を作るほか、菜園オリジナル品種の育成にも取り組んでいます。美恵さんの食彩村での販売には、始める当初から賛成で、市場出荷用と直売用をそれぞれ分けて栽培計画に盛り込み、この時期にはこういう物も作れる、と提案してくれるそうです。

一方で美恵さんは、商品の売れ行きで消費者が好む色やオリジナル品種の評価がはっきり分り、そのニーズを孝康さんに伝えています。

息子の優希さんは、アメリカ農業研修を経て2009年に就農し、孝康さんの栽培作業をサポートするほか市場の展示会での営業などを担当し、家族3人が役割分担しています。

忙しさを増していく美恵さんに、孝康さんから小言がもれることもあったそうですが、家族の話し合いを欠かさないようにしています。孝康さんは「妻や息子が時代の流れを見て、どんどん先を走ってくれるから、自分は花の栽培に集中できる」と、美恵さんの活躍を評価しています。



夫の孝康さん（左）と息子の優希さん（中央）

ビジネスの知識も積極的に吸収

美恵さんは、異業種の経営者と肩を並べてビジネスプランを作成する勉強会に参加するなど、経営に関する知識習得にも積極的です。昨年はマルシェで販売ブースとするための軽トラを購入し、信用金庫の指導を受けながら補助金の申請書を自ら作成しました。食彩村での販売を始めた当初はどんぶり勘定だったそうですが、こうした機会を通じて生産経費の数字が分かるようになり、今後の経営計画もはっきりさせることができました。

食彩村への出荷量は、今では菜園で生産する鉢花の4分の1以上を占めており、鉢花の市場価格が低迷する中、有利販売につなげています。美恵さんは、直売にはまだまだ伸びしろがあると感じており、今後は、QRコードを読み込めば花を楽しむための情報が取得できるラベル作りや、農業分野では弱いと言われる宣伝方法を改善するとともに、菜園ファンを増やす取組を進めていきたいと考えています。



マルシェの販売ブースとして活用する軽トラック

出合いを大切に

美恵さんは活動を続けていくモットーとして「感謝。信頼。挑戦を続ける」と決めたそうです。美恵さんは花の直売のほか、農村生活アドバイザーの活動を通し、消費者との交流の機会も多く作っています。先日は、食彩村のお客さんが別のお客さんに「この花がいいよ」と菜園の花を勧めてくれているところを偶然見かけ、感激したそうです。美恵さんが商品に込めた思いが届いているという実感が日々の原動力になっています。



寄せ植え教室の様子

執筆：農業経営課
取材協力：東三河農林水産事務所農業改良普及課